

第28回日本集中治療医学会総会

公文啓二*

第28回日本集中治療医学会総会は、日本医科大学内科学第一講座教授高野照夫会長主催のもと、2001年3月8日(木)、9日(金)、10日(土)の3日間東京の文京シビックホールおよび東京ドームホテルで医師部門、看護部門および臨床工学技士部門合同で開催された。

会長講演「21世紀に向けての急性心筋梗塞の診断と治療」を筆頭に、特別講演としてForrester分類で名高いJames S. Forrester先生(Cedars-Sinai Medical Center, USA)の「Back to the future; from hemodynamic subset to 21st century strategies in cardiac care」、医師・臨床工学技士共同の伊原正先生(鈴鹿医療科学大学医用工学部医用電子工学科)による「集中治療における医用工学の展望—過去、現在、未来—」、市民公開講座として日野原重明先生(聖路加国際病院名誉院長)による「集中治療における医の心」と題する講演を拝聴できた。医師部門では現在集中治療の現場で直面している諸問題について、世界的に著明な先生方による8題の招請講演[Sten Lindahl (Karolinska Institute, Stockholm, Sweden: 「Putting patients with acute lung insufficiencies prone」)、Harvey D White (Green Lane Hospital, Auckland, New Zealand): 「Current concepts and advances in managing acute coronary syndromes for new century」、Israel Rubinstein (University of Illinois at Chicago, USA): 「New developments in the treatment of chronic pulmonary hypertension」、S.F. Lowry (University of Medicine and Dentistry of New Jersey, USA): 「Immunomodulation for sepsis」、Teiji Sawa (University of California, San Francisco, USA): 「The type III secretion system and pseudomonas aeruginosa

pneumonia/sepsis」、Alan Wong (International Medical University, Malaysia): 「Integrating intensive care into an IT-enabled hospital」、Carolyn Geczy (the University of New South Wales, Sydney, Australia): 「Inflammation, cytokines and the acute coronary syndrome」]ならびに我が国の第一人者による10題の教育講演が行われた。

21世紀最初の総会であり、21世紀の展望を開くフロンティア・セッションとして「臓器再生医学の現況と将来」および「臓器移植、現在から未来へ」が取り上げられた。シンポジウムの議題として「人工臓器の進歩と集中治療への応用」、「新世紀のステント治療とその展開」、「血液浄化の効果と限界:その将来」、「人工呼吸関連肺炎の実態と対策」、「非侵襲的人工呼吸法の今後の展開」、「補助循環を要す心不全・ショック患者の管理と問題点:救命への方策」の8題、パネルディスカッションとして「生体恒常機構の破綻と集中治療」、「小児集中治療の現況と21世紀への課題」、「心疾患患者の非心臓手術」、「致命的不整脈の緊急治療」、「肺血栓塞栓症への対策:発症予防と急性期治療、予後改善へ」の6議題、さらに最近特に議論の焦点となっている「敗血症性ショックへのステロイド治療」、「ARDSへのステロイド治療」および「非保護LMT病変への冠動脈インターベンション」について『Pros and cons:私はこう考える』が設けられ有意義な討論がなされた。ワークショップでは、「急性肺障害」、「蘇生」、「再灌流治療」、「重症急性心筋梗塞の治療戦略」、「ショック・エンドトキシン血症」、「エンドトキシン吸着」、「低体温療法」および「心不全の治療」がとりあげられ、これらの治療の現状が紹介および討論された。一般演題の発表は380題で内85題が講演、残りがポスター形式の発表であった。一般演

*国立循環器病センター外科系集中治療科

題の口演の発表時間は発表7分討論5分計12分で各演題に対して十分な時間が設けられていた。

その他サテライトセミナーとして会期中の3日間で、モーニングセミナー(3)、ランチョンセミナー(18)、ファイアースライドセミナー(11)が企画されており、筆者の参加したセミナーはいずれも聴衆があふれんばかりの盛況であった。

看護部門では二つの招請講演(「Strategies for reducing the risk of infections in the intensive care unit: ICUにおける感染症リスク軽減への対策」: T.G Emori (Center for Disease Control & Prevention, USA), 「Identifying and preventing nosocomial pneumonia in the intensive care unit: ICUにおける院内感染肺炎の同定と予防」: Teresa C. Horan (Center for Disease Control & Prevention, USA)), 四つのシンポジウム(「感染管理担当者の役割と機能」, 「看護におけるリスクマネジメントー医療事故防止のための新たな視点」, 「集中治療における情報開示に向けての取り組みと課題」, 「クリティカルケアの質ー安静と廃用萎縮」, 「より良い学会発表と論文作成を求めて」), 二つのパネルディスカッション(「心筋梗塞急性期リハビリテーションの現況と問題点」, 「小児集中治療の現況と21世紀への課題」) および二つのワークショップ(「根拠に基づいた看護(evidence based practice)ー口腔ケア」, 「臓器移植とヒューマンケア」)に優秀演題12題および一般演題132題の発表がなされ、多数の参加者をつめていた。

臨床工学士部門では前述の医師部門との共同特別講演およびシンポジウムに加え二つの招請講演(「集中治療と臨床工学士の将来像」: 川崎忠行(前

田記念腎研究所臨床工学部), 「オンライン HDF の課題と展望」: 竹澤真吾(鈴鹿医療科学大学医用工学部))ならびに教育講演「次世代人工腎としての透析液再生型腹膜透析システム」: 峰島三千男(東京女子医科大学腎臓病総合医療センター)および二つのワークショップ(「血液浄化」および「集中治療における機器管理」)さらに18題の一般演題が登録されていた。

さらに市民公開講座では、前述の日野原先生の特別講演および公開セミナーとして「一般市民のための心肺蘇生講座ー家族の命はあなたが守る」が東京救急協会および東京消防庁の協力のもとに行われていた。

以上、まさに学際的な集中治療医学に相応しい多彩な内容でかつ「集中治療医学の場で、新しい潮流の今こそ、医学は単に Science ではなく、Art であることを再認識すべきである」という理念に沿ったすばらしい企画であり、高野会長の慧眼に感銘を覚えるとともに集中治療医学の今後益々の必要性および発展が確信できた。私自身は臓器再生医学、人工臓器、移植等の特別企画の聴講やポスターセッションの演題に触れ、確実に進歩してきている臓器再生医学や人工臓器の現状を私なりに把握することができた。また、一般演題の集中治療におけるさまざまな創意工夫にふれさせていただき、すでに日常の臨床に応用させていただいているものもいくつかある。集中治療に関連するすべての医療従事者が参加でき意見交換を行うことができる本学会の意義は極めて重要であることを改めて体感できた総会でもあった。